■シリーズ■

中学校武道

――授業の充実に向けて 173

――「今」の時代の武道授業を追い求めて――②

（授業実践をもとに剣道授業を考える）

宇都宮市立晃陽中学校副校長　山田博子

中学校保健体育教諭として15年勤務し、10年の行政生活を経て昨年度から中学校で勤務している。現在、保健体育の授業を週３時間担当しているが、10年ぶりの学校現場は、学習指導要領の改訂、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により新しい生活様式に基づいた学校生活、学習用端末を活用するＧＩＧＡスクール構想など大きく変化していた。今年は、新型コロナウイルス感染症が５類感染症に移行し転換期を迎えているが、ウィズコロナの中、踏み出す一歩は今後の試金石となると捉えている。

現在剣道授業は、文部科学省の「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル（Ｖｅｒ．９）」により、「感染症対策を講じてもなお感染のリスクが高い学習活動」の「近距離で組み合ったり接触したりする運動」に該当していることから、全日本剣道連盟作成の『新型コロナウイルス感染症予防に留意した中学校における剣道授業の展開（手引き）【改訂版】』を参考に対策を講じながら実施している。

私は14年前の２００９年12月号本連載で剣道授業実践（平成18年「全国中学校体育・保健体育研究発表会」実践発表）について紹介した。その後、武道が必修化となり、さらに剣道授業のための研修会や授業研究などが各地で行われ、その指導法は実践に活かされていると感じている。10年前から日本武道館主催の「全国剣道指導者研修会」に講師として参加し、全国の先生方の熱心な取り組みを身近に感じ、多くのことを学ばせていただいた。

今回は、令和の日本型学校教育の趣旨を踏まえながら、学習指導要領の内容と照らし合わせ、これまでの授業実践の内容をもとに剣道の授業について考えてみたい。

1 「令和の日本型学校教育」と「令和の日本型学校体育」について

中央教育審議会から令和３年１月に「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」が示された。

子供一人一人を大切にするためには、学習場面で、個々の学習状況に応じた指導が必要であり、「個別最適な学び」では子供一人一人の特性や進度に応じて、指導方法・教材や学習時間の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」。子供自身が、学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」を図ることが必要である。また、「協働的な学び」では地域の授業協力者との学び、先生との学び、仲間などの学びを通じて、対話を重ねながら考えや体験を深めることが必要である。

保健体育でも、この答申を踏まえた授業改善が求められており、スポーツ庁では令和４年から「令和の日本型学校体育構築支援事業」を実施し、その中に「多様な武道等指導の充実及び支援体制の強化」を位置付けている。

学校の体育活動は、体力向上、健康増進、競争心や協調性、他者を尊重する精神の涵養（かんよう）、人間関係の形成など、生涯にわたる豊かな生活を実現するための基礎が培われるものである。子供たちが運動やスポーツに親しむことができるようにするためには、体育の授業で運動の多様な楽しみ方を共有し、運動が苦手な子供をはじめ、全ての子供にできる喜びを味わわせていくことが求められ、「令和の日本型学校体育」の構築に向けて、子供たちの安全・安心を確保し、技能差・体力差・体格差等に配慮しながら、個々の能力に適した指導・支援を行うことで、全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びを実現する体育の授業改善を図ることが求められている。

本稿では、それぞれの学びを一体的に充実し、学習指導要領の内容と照らし合わせ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげるにはどのようにしたらよいか。剣道学習ではどのように展開できればよいか考えたい。

2 剣道の現状と課題

⑴剣道授業の現状

今年（２０２３）４月号の月刊「武道」に掲載された「令和４年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」によると、全国的な剣道授業の実施率は37・８％であった。しかし平成30年度（２０１８）は35・７％であったので、実施率は増加傾向といえる。ちなみに宇都宮市は剣道の実施率が100％であり、必修化以前から高い実施率を誇っており、剣道授業が根づいている。

また、スポーツ庁委託事業「武道等指導充実・資質向上支援事業に係る武道指導に関する調査結果（２０１９）」によれば、剣道の授業で楽しかったことの主な理由として、「基本となる技（応じ技や難しい技）を打ったとき」や「簡単な攻防（一対一）で戦うことなど）」「達成、成功（面や胴をきれいに打てたなど）したとき）」が多いというデータがある。

これらの結果から、子供は基本技や応じ技などを上手に打ち込めたことで達成感を味わい、簡易な攻防を一対一で行うことを楽しみ、試合で１本を取るなどの成功体験をさせることが楽しい剣道授業の実現につながることがわかる。

⑵剣道授業の課題

しかし、年間の配当時間は８時間程度が平均的である。中学校で初めて体験する武道は、基礎を身につけるまでに時間がかかる上に、剣道具を装着するなど初めての体験が多いため、時間を要するのが現状である。８時間程度で剣道の醍醐味である攻防の展開まで導くことは容易ではない。また、剣道は「痛い」「臭い」「難しい」といったマイナスイメージから始

まることが多いことから導入の工夫も必要である。

これらの課題を踏まえながら、一人一人に剣道の魅力を知ってもらい、できる喜びを味わわせる剣道授業の展開を目指したい。

3 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

学習指導要領解説総則編では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」の三つの視点に立った授業改善を行うことが示されている。この視点の具体的な内容を手がかりに、「質の高い学び」を実現し、学習内容を深く理解することを通して、資質・能力を身につけ、子供が生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることが求められている。

以下の内容は、すでに過去に寄稿したものや、『剣道授業の展開』の中でも紹介されているものも含まれるが、改めて「主体的・対話的で深い学び」の視点から剣道指導について考えてみたい。

4 主体的な学び

⑴生徒の「興味・関心」を引き出す「オリエンテーション（1時間目）」

多くの生徒が、保健体育科の授業で「武道」と初めて出逢う。また、剣道の事前アンケートをとると、多くの生徒が「痛そう」「臭そう」といったマイナス面を挙げることが多い。それをまず取り除くには「安心して学習に取り組める」という環境づくりである。

① 短時間で基本を定着させるための方法としてスキルテストがある。痛くない技の取得や、小さく速い打ちの取得。そのための柔らかい手首の使い方、応じ技に役立つ基礎作りなどがねらいだ。特に、剣道の経験のない人は手首を柔らかく使うことが苦手で、足を引きつける動作が不慣れだ。しかし、短時間でこれらを習得することは困難な状況にある。そこで授業冒頭の数分間を使い、継続して行えるスキルテストを紹介する。内容は次のとおりである（資料1）。

留意点としては、指導者はあくまで技能向上のための基礎づくりということをよく理解し、やり方を統一して行うことが重要である。目的にそって、正しいやり方でやらせることができれば、基本が身につき意欲向上にもつながる。目標となる全体的な評価基準を提示し、記録更新をねらいながら、結果、基本となるスキルを身につけることが重要である。

②アイスブレイキングの工夫

次に挙げる内容は「全国指導者研修会」の取組から学んだオリエンテーションの内容である。剣道と良い出逢いができるよう、最も丁寧に行うべき内容の一つが「導入」すなわち、1時間目の「オリエンテーション」である。いくつかの具体例を挙げる。

・手の平攻防
・足の攻防
・剣道じゃんけん
・手ぬぐいゲーム　など

③剣道は「臭い」を払拭（小手下・面下の活用）

剣道が嫌いになる要因としては、①臭い・他人の汗が汚い、②剣道具を着けるのに手間がかかるなどの理由が考えられる。そこで、このマイナスイメージを克服させるために、剣道具の工夫がある。さらに、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止を踏まえ、全日本剣道連盟作成の手引きを参考に、剣道具や竹刀など、用具の衛生面の管理の徹底を講じる必要がある。

ア．臭い・他人の汗が汚い

〈対策〉⇦

・面を着ける際には頭巾やあごあてなどを利用し顔を覆う（写真1）

・小手下を着けてから小手を着ける

イ．面を着けるのに手間がかかる

〈対策〉⇦

・面ひもに透明のホースを通し絡みにくくする（ホース2㎝程度）（写真2）

資料１　スキルテスト評価一覧表

番号	内容	方法	技名	A	B	C
1	竹刀の連打	元立ちは面の高さで受け、連続で面打ち。	手首の柔らかさ	130 回以上／30 秒	129 ～ 100 回／30 秒	99 回以下／30 秒
2	竹刀のボールつき	構えた高さから、ボールを竹刀で連続でつく。	手首の柔らかさ	80 回以上／30 秒	79 ～ 70 回／30 秒	69 回以下／30 秒
3	竹刀の縦打ち(写真４)	元立ちは竹刀を立てて持ち、振りかぶったところから、柄頭を連続の打突。	芯を捉える	35 回以上／30 秒	34 ～ 25 回／30 秒	24 回以下／30 秒
4	ライン間の往復打ち	二本のライン間を、踏み込んで面打ちをしながら往復する。	左足の引きつけ打ち抜ける速さ	15 回以上／30 秒	14 ～ 11 回／30 秒	10 回以下／30 秒
5	連続打ち	小手ー面ー胴ー小手ー面の連続打ち。審判は元立ち５人。	左足の引きつけ連続打ち（かかり稽古）	気剣体一致で５本	気剣体一致で４本	気剣体一致で３本以下
6	面返し胴	元立ちは振りかぶって面の連続。応じる方はそれを受けて返し胴の連続。(表・裏)	返し技（手首の返し）	50 回以上／30 秒	49 ～ 35 回／30 秒	34 回以下／30 秒
7	跳躍面	元立ちは面の高さで受け、跳躍しながら面打ち。連続。	抜き技	45 回以上／30 秒	44 回～ 40 回／30 秒	39 回以下／30 秒
8	小手抜き跳躍面	元立ちは小手打ちの連続。小手を抜いて面の連続。	抜き技	45 回以上／30 秒	44 回～ 40 回／30 秒	39 回以下／30 秒
9	面すり上げ面	元立ちは振りかぶって面の連続。応じる方は表と裏、交互にすり上げ面。連続。	すり上げ技	25 回以上／30 秒	24 回～ 20 回／30 秒	19 回以下／30 秒
10	ボール打ち	元立ちがタイミングをみてボールを面に向かって投げる。踏み込んで面打ち。	出端技	４本打ち返した／５本中	３本打ち返した／５本中	２本以下打ち返した／５本中

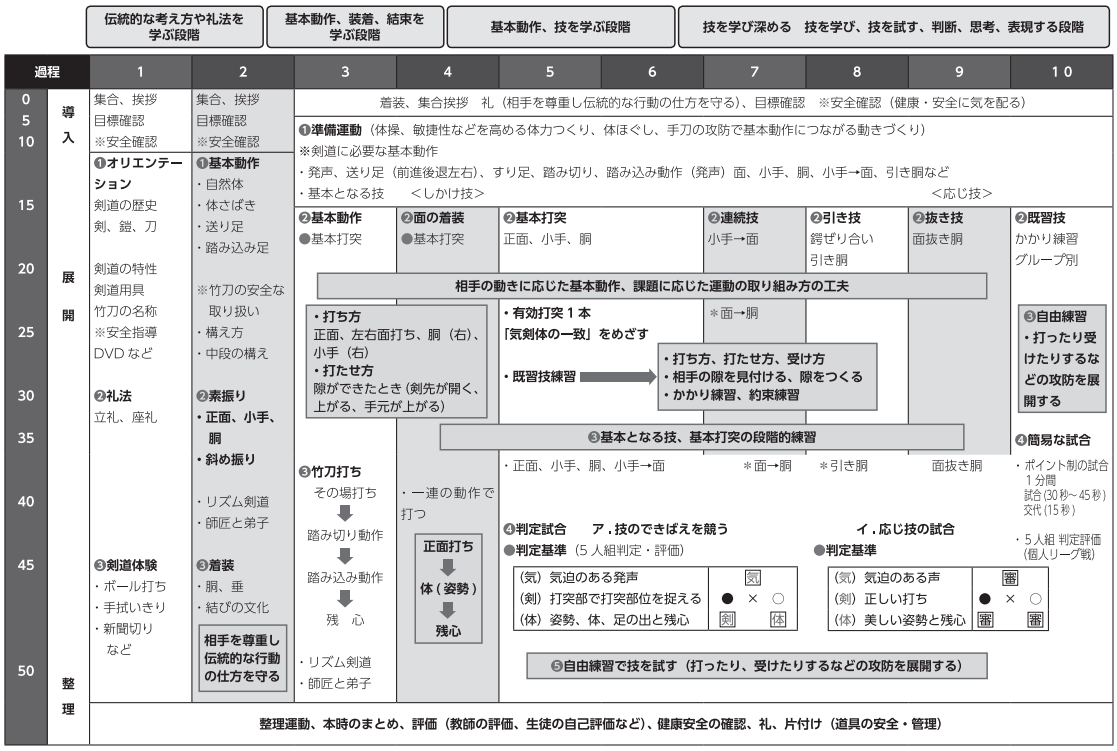
写真４　竹刀の縦打ち

写真２　面ひもにホースを通す

写真１　頭巾やあごあてを利用する

写真３　助け合って剣道具を装着

資料２　第２学年「学習指導計画」の例（『剣道授業の展開』）



ペアで防具の装着が定着してきたところで（写真３）、剣道具の装着チェックリストによる相互評価の実施。スピードと正確さを確かめ、教え合いながら効率性を高める。着装に時間をかけすぎて、本来の楽しさや目的に触れずに終わってしまうことは避ける。面ひもを結ぶことで〝結ぶ文化〟も大切にしながら、効率的に剣道具を装着させたい。面ひもを結ぶ際には、面ひも用のホースを利用するなどの工夫もいる。ある程度、しくみや装着方法を身につけスムーズに防具の着脱ができるようになった後に、本来の方法に戻すのも一手段と考える。

⑵学習の見通し（単元計画）をわかりやすく提示する（資料２）

子供が主体的に学習に取り組めるように、学習の見通しを立てたり、学習を振り返ったりして、自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するのか、対話によって自分の考えなどを拡げたり、深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくりだすために、子供が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかといった観点で単元計画を立て、子供たちに示すようにする。

⑶本時（または単元）の課題と課題解決の方法を明確にする

授業では、子供自身が「単元目標や本時の目標を達成するための課題は何かに気づく」ことが大切である。ここでは、「判定試合」を例に挙げる。

⑷授業実践例

☆仕かけ技の習得を目指した判定試合（学習形態：グループ学習）

【この時間の「評価規準」※「おおむね満足できる」状況】

基本打突の仕方と受け方では、中段の構えから体さばきを使って、面や胴（右）や小手（右）の部位を打ったり受けたりすることができる。（技能）

ア．目的

子供がまず「痛い」打ちをなくし「有効打突」を身につけるため判定試合を導入した。共通的な課題は、全子供が1本になる「有効打突を身につける」としている。しかしながら、剣道は1本（有効打突）がわかりづらいという側面がある。特に中学校で初めて出会う武道（剣道）では生徒がわからないことが多い。生徒から見ると、「気・剣・体の三つを同時に見取ることが難しい」「どの打ちが1本なのかわからない」などの回答が多いことから、以下のような方法で判定試合を行い、生徒個々が自身の課題と課題解決の方法を明確にするようにした。

写真５　判定試合（令和３年度全国剣道指導者研修会）

イ．判定試合の方法

有効打突を習得する方法としてその条件は三つあるが同時に見取ることが難しいため、「気・剣・体」の三つを分解し、合格となる基準（ポイント）をわかりやすくキーワードにして提示した。

ウ．判定基準

気：大きなかけ声（気迫）

剣：竹刀の打突部で打突部位を捉えている

体：体さばき（踏み込み）、残心　※踏み込みは徐々に指導する

さらに生徒の「自分の打ちが1本(有効打突)なのかわからない」との意見を参考に、審判が判定し確認することとした。その際、審判は気剣体のそれぞれ一つだけを判定し3本旗が上がれば合格とした。判定後はその理由を試合者に説明することを義務付けた。

エ．評価方法

・絶対評価（個人）……審判3人がそれぞれ気・剣・体の札を持ち、判定基準に則り判定を行う。試合者の片方が面・小手・胴の順番で披露した後、審判は「判定」の掛け声で旗を上げる。3本ともに旗が上がれば勝ちとなり、次は同じ手順で逆の試合者が面・小手・胴を披露し判定する。（写真5）

判定試合後の話し合いの注意点では、審判はわかりやすく、前向きな言葉で「どこが良かったか」、「どう修正したら旗が上がるか」について伝えるというルールを決めた。その結果として、

1．審判者が試合者に具体的な言葉で判定理由を伝えることにより、試合者の課題解決の方法が明確になる

2．試合者の技能が高まることにより、審判者が試合を重ねごとに真剣な態度で臨む

3．試合者は3本旗が上がることで「有効打突を打てた」という課題解決の達成感を味わう

などが示された。

オ．留意事項

・面・小手・胴の順番で3本を披露する判定試合では、1本目はできているが2本目や3本目をミスする場合がある。その際、修正が必要な技が1本でもあれば旗を上げず、修正ポイントを伝えることが次につながることから厳しく判定させたい。あくまで目的は有効打突の習得のため勝敗にこだわりすぎない。

⑸毎時のふりかえりを大切にする

本時では「何を学んだのか」「何ができるようになり、何が課題となったのか」について、自己の学びのふりかえりを習慣化することが大切である。

⑹本時（単元）の学習成果の確認

「面で1本がとれるようになった」「審判が上達した」など、学びの成果を数多く実感できるようにすることが大切である。反対に「小手で1本とれなかった」などの、できなかったことも成果として捉えて次の課題につなげる言葉がけを教師が機を逃さずに行うこ

とが大切である。

5 対話的な学び

⑴生徒の表現力を伸ばす手立て

一人一人が課題を明確にし、言葉で表現しやすいようにするために、対戦型の試合を紹介する。対話的な学びとは一概に言葉が多く飛び交うことが目的ではない。指導目標を達成するための手段であるということを念頭に置いて、生徒相互の有意義な対話が実現できるようにしたい。

☆対戦型の判定試合
（学習形態：グループ学習）

【この時間の「評価規準」※「おおむね満足できる」状況】

体力や技能の程度、性別等の違いに配慮して、仲間とともに武道を楽しむための活動の方法や修正の仕方を見つけている。（思考・判断・表現）

ア．目的

判定試合は、試合者が交互に基本技を披露し、どちらが優れているか判定で決める対戦型の試合方法である。対戦型は、これまで個人内評価である程度上達している2人で対戦することが大切である。

審判者は、それぞれの試合者の違いを見つけて勝敗を判定することが求められる。しかし、この対戦型を行うことで、試合者の本気度が変わり、審判がより深いところで違いを見つけ指摘する箇所を探さなければならないため真剣さが増す。対戦型は、試合者以上に、審判者の思考力や判断力における課題とその課題解決という観点からも有効である。

イ．方法

判定試合は、試合者2人審判3人の5人グループ（基本）で行う。

ウ．評価方法

・相対評価（対戦）

個人評価と同じく審判3人がそれぞれ気・剣・体の札を持ち、判定基準に則り判定を行う。試合者は面・小手・胴の順番で交互に披露する。審判は各々が終わった後、「判定」の掛け声でどちらか一方（優れている方）に旗を上げる。上がった旗が多い方が勝ち。

エ．留意事項

・打突と足さばきがずれている、発声が遅れるなどがないように最終的には気剣体が一致するようにさせる。

・相手との勝負（相対評価）になった場合、基立ちによって、試合者が上手に打ち込めない場合も生じることから相手は協力者であること理解させ、正々堂々と戦わせる。

オ．成果

○審判者が簡易試合で、有効打突（1本）を躊躇せずに判定する場面が増えた。

○気剣体一致の有効打突を身につけることで、応じ技も早く習得できるようになり、簡易試合で有効打突（1本）を取得できる生徒の割合が増えた。

○審判者の対話の様子や試合者の試合内容から、確実な知識や技能の定着とともに、思考力や判断力、表現力につながっている。

6 深い学び

⑴易しい課題に終始せず、試行錯誤を促すための工夫

子供が、課題解決に向けて試行錯誤を繰り返し、仲間や地域指導者、教師などの他者の力を得ながらも、自らの力で課題解決できるような場面を設定することが大切である。そのために以下の「級審査」を例に挙げる。（資料4）

☆基本的な技能の定着を図るための級審査の導入
（学習形態：ペア学習）

ア．目的

基本動作や基本打ち、連続技や応じ技の習得を目指し学校独自の級審査を導入した。剣道は段位制度がある。昇段審査に挑戦することは老若男女が生涯にわたり剣道を継続できるモチベーションの一つとなっている。その特徴を生か

して学校独自の基準で級審査を行い意欲向上につなげたい。

目的は、全員に基本動作や基本的な技能を習得させ定着を図ることがねらいである。子供自身のつまずきを見える化し、各個人の段階に合わせた練習が行えれば目標が明確になり主体的に取り組めるようになり、より正確な技能や知識などの習得に向けて、自ら取り組むようになることを目指していく。

写真６　級審査は審査員（左）が行う

写真７　名札に級シールを貼付

イ．級審査の方法

1　一斉指導により技のポイントなどを説明し実践する

2　ペア学習（課題や能力が同じ級同士で）により技の探求

3　審査（審査員：保健体育教員および外部指導者・写真6）

4　審査結果を踏まえペア学習（上級者は級取得が遅れている生徒への支援）

5　合格者には学校独自の認定証を授与（名札に級シールを貼付・写真7）

ウ．成果

○合格するまで何度も練習を行うことから運動量の確保につながり、技能はもとより、体力の向上につながる。

○ペアに限らず合格した生徒にアドバイスをもらう場面を意図的に作ることで、必然性のある対話が広がり、最後はほぼ全員が最上級に合格することができる。

○生徒は自分の目標が明確となり、自ら達成感を味わいながら取り組める。

○審査員の前で、緊張感をもって技を披露することは、ペアがより協力し合い真剣な態度で臨む姿が見られる。生徒同士の学び合いが促進され、合格した喜びが大きく達成感につながる。

エ．課題

○審査の手間と時間を要する。

○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を考えることは、単元や題材など内容や時間のまとまりをどのように構成するかというデザインを考えることに他ならない。主体的・対話的で深い学びの実現は、バランスある資質・能力の実現につながり、さらには生きる力を育むものとなる。

⑵課題の解決に向けた思考の深まり

『剣道授業の展開』の中では、剣道で伝えたい精神性・態度育成を以下のとおり整理し、剣道の単元計画（資料3）の中で記載することを推奨している。

深い学びが目指すところは、剣道という「教材」と豊かにかかわり、剣道の特性に触れる楽しさを味わうとともに、剣道の意味や価値に気づかせる指導が大切である。

⑶1人1台端末の活用

（学習形態：ペア学習）

ア．目的

目的を「基本技や応じ技、自分に合った技の習得」とし、ＩＣＴ（情報通信技術）としてタブレット端末などを活用しながらペア学習やグループ学習で実践する。個々で異なる技を練習する際には、ＩＣＴの活用は有効である。以前私が、ＩＣＴを活用して実践していた際は「得意技」の習得を目指し実践していたが、現行の学習指導要領ではその表記がない。そのため、自由練習や簡易試合で試せる技を一つ選びＩＣＴを活用しながら習得を図る。

イ．1人1台端末を活用した技の方法

▽師範の技を映像で見てイメージ作りを行う。→師範のＤＶＤを活用する。（写真８）

・自分やペアの映像を見て課題を発見する。→映像を遅延する装置をうまく活用して、技の実践後、すぐに映像を視聴できるようにする。

・ペア学習で、つまずいた時は師範のＤＶＤで確認をさせる。

・出来栄えを遅延装置で確認。（繰り返す）

・自由練習や簡易試合の映像を見て、自分が良く使う技や有効打突になりやすい技を発見しさらに練習を行う。

写真８　師範の技を動画で確認

▽パソコンの活用【全体】

・パソコンを体育館に数台設置し、師範のＤＶＤがいつでも見られるようにセッティングしてもよい。

・遅延装置は全員が行うのではなく、パソコンを電子黒板につないで準備をして、確認したいペアだけが活用するという方法でもよい。

ウ．成果

○生徒の興味関心を高めることができた。

○課題ややるべきことを把握することができた。

○自分や相手の動きを撮影した動画をもとに話し合い、活動が活発化された。

エ．今後の活用について

「令和の日本型教育」の個別最適な学びと協働的な学びの実現では、基盤的なツールとしてのＩＣＴの活用が不可欠とされている。ＩＣＴの活用によって、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることができ、ＩＣＴを利活用することによって、主体

資料３　単元計画は剣道で伝えたい精神性・態度育成を記載（『剣道授業の展開』）

具体的な指導内容と単元の評価規準 ※第2学年の例	知識・技能	剣道は対人的な技能を基にした運動で、我が国固有の文化であることについて、理解したことを言ったり書き出したりしている。	剣道には技能の習得を通じて、人間形成を図るという伝統的な考え方があることについて、理解したことを言ったり書き出したりしている。		剣道の技には名称があり、それぞれの技を身に付けるための技術的なポイントについて、理解したことを言ったり書き出したりしている。		有効打突の条件を言ったり、書き出したりしている。			試合の行い方について、ごく簡易な試合におけるルール、審判及び運営の仕方など、学習した具体例を挙げている。	
				相手の動きに応じた基本動作ができる。		相手の動きに応じた基本となる技ができる。			しかけ技や応じ技を用いて打ったり、受けたりしている。		相手の動きに応じて打ったり受けたりするなどの簡易な攻防をすることができる。
	思考・判断・表現						有効打突のポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。	学習した安全上（禁じ技など）の留意点を、他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えている。		体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習や簡易な試合を行う方法を見付け、仲間に伝えている。	
	主体的に学習に取り組む態度	相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとしている。	剣道の学習に積極的に取り組もうとしている。			場所、用具の安全に留意し、仲間と協力して安全に剣道具を着けている。		記録や審判など、分担した役割を果たそうとしている。	禁じ技を用いないなど健康・安全に留意している。		一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。
剣道で伝えたい精神性・態度育成	**剣道の歴史** ・江戸時代から受け継がれた我が国の身体運動文化・対人運動（伝統的な考え方行動の仕方）を学ぶ **剣道の特性** 対人性 ・剣道は相手と正対し、相手の目を見て技を競う、相手の目を見て礼を行う ・礼（禮）は相手を尊重し、感謝し行う日常での礼の実践の大切さを学ぶ **道具の安全と管理** ・道具を安全に大切に取り扱う。物を大切にする心は相手に対する思いやりの心を育む		**残心** ・残心は技を打った後も気を抜かずに身構え気構えを示す動作であるが「残心」のある生活の大切さを知ることで今後の人生に活かせることを学ぶ **間合（距離）** ・相手と自分の距離を近すぎず、遠すぎず、適切な距離の中で攻防を楽しむ体験により、人間関係づくりも同様に、相手との距離を考えることを学ぶ		**勇気（克己）** ・恐怖心を打ち破る真の勇気を持って攻める気持ちや立ち向かっていく正義感を学ぶ **努力（守破離）** ・基本練習は同じことを繰り返し身に付けていく、これは苦痛でもあるが技を自得するためには必要な過程であり、教えを忠実に守り、ひたむきに努力することの大切さを学ぶ **感謝・思いやり** ・打つ、打たれることで互いの痛みを知り、思いやりの心を知る。また技や心の向上により、感謝や優しさを学ぶ		**共存と共生** ・基本技の練習で打ったり、打たせたりして、基本技の出来栄えを確認し合う中で、互いによりよい技をめざし相手と互いに高め合うことの大切さを学ぶ **判断力（正義感）** ・試合や審判で、有効打突の条件である「気剣体一致」を理解し、素早い動きで打ち合う技を、瞬間的に正しく判断し、決断・評価すること。 また、仲間との認め合いや学習課題の定着・深まりを学ぶ		**惻隠の情** ・剣道では勝敗が決まった後も、勝ち負けにとらわれずお互いが心身を正し礼法を行う、これは誰もが湧き上がる感情を抑え、負けた人の心を汲み取るという武道の伝統的な考え方があることを学ぶ **平常心** ・試合を体験することで、精神的に不安を抱くなど、緊張や動揺する自分の気持ちを、自分で調整することを学ぶ	

剣道級審査　基準表

学年	級	達成項目	具体的な内容	判定
1・2年	9級	①礼儀作法 ②竹刀の握り方 ③竹刀の振り方	①相手を尊重し、規則や礼法を守る態度を身につけることができる。（道場の出入りや授業前後のあいさつ、相手へのあいさつを、目を見ながら大きな声でできる） ②竹刀を上から握り、柄の端と端を持つことができる。構えた時の剣先は相手のおおよそ喉の高さで肩の力が抜けている。 ③真っ直ぐに振りかぶり振り下ろすことができる。	
	8級	①気合い ②足さばき	①打突と一緒に気合を出すことができる。 ②左足が右足より前に出ない足さばきができる。	
	7級	打突＋体さばき （送り足・残心）	・竹刀の打突部で、小手・面・胴が打てる。 ・打突時の竹刀の音と踏み込みが同時にできる。 ・打突後、すり足で抜け残心をきめることができる。	
	6級	２・３段技	・動作を連続してできる。 ・１本目の打突後、左足の引き付けを素早くできる。 ・手と足の動きを合せて打突できる。	
	5級	体当たり引き技	・お互いがポンとはじけるように体当たりができる。（ボールがぶつかり合う感じ） ・体当たりをした後に下がりながら打突ができる。 ・素早く引いて間合いをきることができる。	
	4級	抜き技	・体さばきを使って抜くことができる。 ・素早く打突することができる。 ・抜くことと打突を一連の動作ですることができる。	
3年	3級 一つ選択	出ばな技	・タイミングをとらえて打突することができる。 ・体勢を崩さずに、思い切って踏み込んで打突することができる。 ・打突部で打突部位を打ち、残心を示すことができる。	
		払い技 （遠間から一足出て払い、踏み込んで打突）	・表か裏から払うことができる。 ・払った後、打突と踏み込みを合せることができる。 ・打突部で打突部位を打ち、残心を示すことができる。	

的・対話的で深い学びによる授業改善にもつなげることができる。注意する点としては、ＩＣＴの活用はあくまで手段であり、目的ではないことをしっかりと捉え、教員側がはっきりとした目的を持ち、それを果たすための目標を立て授業に臨むことが重要と考える。結果、ＩＣＴの活用が有効であったという授業にしたい。授業を組み立てる際には、単元計画のどの部分で利用すると目的が達成できるのかを明確にし、主体的・対話的で深い学びの実現につながる授業改善を目指し、三つの資質・能力をバランスよく育成できるようにしていきたい。

7　終わりに

令和3年3月に文部科学省初等中等教育局教育課程課から発信された「学習指導要領の趣旨の実現に向けた 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」では、新たに学校における基盤的なツールとなるＩＣＴも最大限活用しながら、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められている。

写真９　指導を行う筆者（右）
（平成 30 年度全国剣道指導者研修会）

特に個別最適な学びについては、剣道の授業においてもより一層の研究が必要であると思う。全ての体育教師が、それぞれの生徒の学習進度や学習到達度に応じた教材や学習時間を提供することは容易なことではないからだ。現状は1人1台端末の普及により、少しずつその個別最適に向けた環境は整いつつあるが、剣道においてもその研究・開発が急務であると思う。

きめ細やかな指導を実現させるために、以前は地域指導者の協力を得て授業実践を行っていた。より専門性が必要となる剣道では、専門家が実技を実際に見せることで生徒たちの意欲向上や技の上達にもつながる。また安全管理の面でも、専門家の目線でアドバイスを受けられることから、地域指導者の活用を推奨したい。

終わりに、剣道の目的は人づくり、教育の目的も人づくりにありいつの時代も変わらない。私が、以前行った生徒対象のアンケート調査では、「剣道を学ぶ目的は何ですか」という質問項目について、事前調査では「礼儀正しさ」と回答した割合が21％であったのに対し、事後アンケートでは41％に向上した。この結果から、生徒自身が剣道の授業で礼儀正しさを学んだことを実感し、剣道授業の目的として捉えることができたことが伺える。学習指導要領が変わり、授業づくりや視点が変わっても剣道の本質は変わらない。

剣道は竹刀を使って互いに打ち合う攻防の展開の中で有効打突を求めて楽しさを味わう特性があり、その相手は、体力の向上や技の習得、心を養うための良き協力者という考え方がある。良き協力者である相手に対して、心から敬意を払うことは不可欠であり、その考えを態度（形）で表すのが礼儀作法である。1対1で対峙し、相手と真剣に向き合う剣道だからこそ自分と向き合い、勝った喜びや負けた悔しさを抑え、惻隠の情の気持ちで相手に礼をすることを学ぶことができる。また、その態度を日常の生活に生かすことは好ましい社会的態度の育成につながると考えることから大切にしていきたい。